

# ドイツの切手に現れた科学者、技術者達 (11) ゲオルグ・クリストフ・リヒテンベルク

*Scientists and Engineers in German Stamps (11). Georg Christoph Lichtenberg*

筑波大学名誉教授 原田 馨  
KAORU HARADA

*Professor Emeritus, University of Tsukuba.*



G. C. リヒテンベルクの誕生250年記念切手、1992.

## ゲオルグ・クリストフ・リヒテンベルク

ゲオルグ・クリストフ・リヒテンベルク (Georg Christoph Lichtenberg, 1742-1799) ドイツの物理学者で批評家、文筆家。

リヒテンベルクは、ダルムシュタット (Darmstadt) の郊外のオーベル・ラムシュタット (Ober-Ramstadt) の牧師館で生まれた。父親は牧師であり、17番目の息子であった。オーベル・ラムシュタットは、現在では拡大したダルムシュタットに呑み込まれてその町の一部となっている。オーベル・ラムシュタットには今もその牧師館が残っており、建物の外の壁には記念板が掲げられている。牧師館の近くには2階建ての木造の建物があり、これは現在地方の小博物館となっている。これについては後に述べる。

子沢山の家庭は裕福ではなかったが、リヒテンベルクは頭のよい子供であった。奨学金を得てギムナジウム (中等教育機関) を卒業し、ゲッチングン大学へ入学して数学、物理学、天文学を学んだ。生まれつき背中に瘤があったが、明るい性格で発想がユニークであり、軽口をたたくことを好んだ。またいろいろな事実や予想を書きつける趣味があった。

ゲッチングン大学の教授として30年にわたり (1769 -1799) 物理学を講じた。彼が発見し、彼の名を冠した物理現象に「リヒテンベルクのパターン」がある。これは細かい絶縁体の粉をふりかけた板に放電すると粉が放射状に分散して形成される図形のことである。

リヒテンベルクには文才があり、文筆業も彼の好みであり、またこれが彼の職業でもあった。彼の文筆業は当時の人々の啓蒙に役立ち、彼の箴言 (しんげん) は人々の知的興味を満足させた。

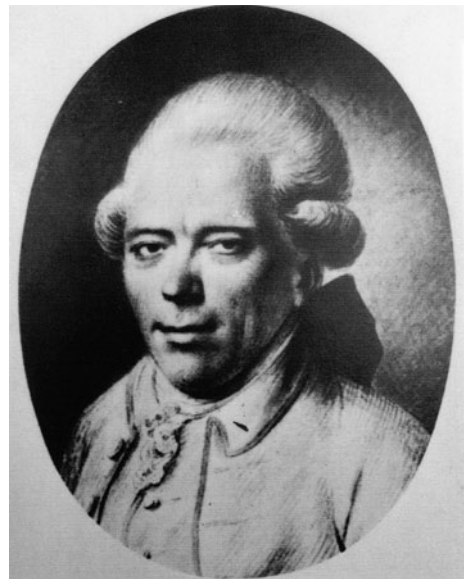
リヒテンベルクが彼の元女中であった女性と結婚した過程は如何にもリヒテンベルクらしい。リヒテンベルクは独身であり、ゲッチングンのゴットマー通1番地にずっと住み続けていた。女中のマルガレーテ・ケルナー (Margarete Kellner, 1759 -1848) がリヒテンベルクの世話をしていた。彼は彼女と結婚していないのに次々と子供が生まれるので、大学当局は彼にマルガレーテと結婚するようにと勧めたが、リヒテンベルクは「私は身体

的に醜くとも結婚はできません」と断り、それまでのような生活を続けていた。ある時リヒテンベルクが重い病気にかかり命も危ない状態になった。この時大学当局は、リヒテンベルクにマルガレーテとの正式の結婚が生き残った人々のために必要であることを説いた。リヒテンベルクはいよいよ観念して病床で結婚式を執り行った。ところが死ぬと思われていた彼の病状は次第によくなり、病気から回復して以前のように元気になった。しかし家庭内での状態は以前と全く変わってしまった。リヒテンベルクはすべての事情を知っている元女中のマルガレーテの監視のもとに暮らすことになった。このような事情を知っておれば、ゲッチンゲンのバーソロマイ墓地に並んで立っている同型のリヒテンベルクの夫妻の墓を訪ねることは興味深い。この話はG. プラウゼの「天才の通信簿」による。この夫妻の墓は遺体の入っていない記念石碑(Gedenkstein)であると云う人もいるが、真実は現在のところ不明である。

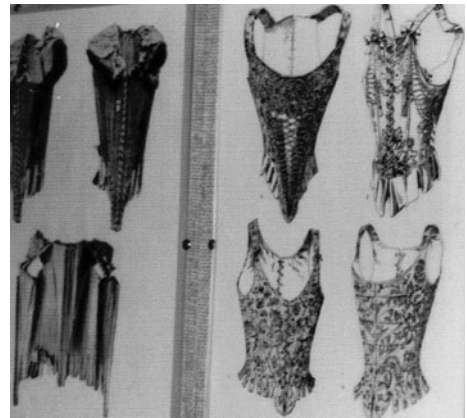
牧師館の向いには、この地方の小さな地方博物館がある。1階には昔この地方で製造された古い自動車が展示してあるが、2階はすべてリヒテンベルクの展示場である。そこにはリヒテンベルクのパターンをつくる放電板を含めていろいろな物品があった。琥珀を用いて作った放電板はこの博物館長が作ったものと云う。奇妙なことに女性の下着のコレクションもあった。リヒテンベルクは大変好奇心の強い人であったに違いない。

数年前リヒテンベルクの立像と座像2体がゲッチンゲン市のマルクト・プラッツと図書館の裏側の広場(Hof)に設立された。前者の立像の表情が如何にもリヒテンベルクらしい。マルクト・プラッツの広場とは有名なガチョウを連れたブロンズ像のある広場のことである。ガチョウを連れた娘の像のある斜向いにリヒテンベルク像が立っている。

※本稿に掲載の写真は、全て著者の撮影したものである。



22ページの切手のモデルになったカツラをつけたリヒテンベルクのポートレート。

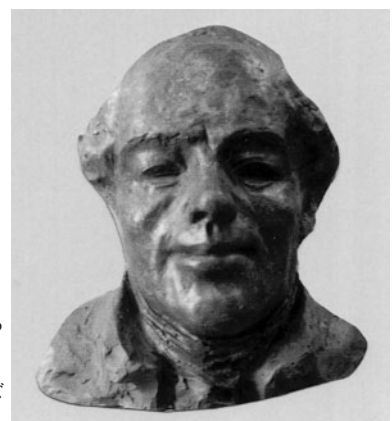


博物館の壁の一角に女性の下着のコレクションがある。リヒテンベルクの興味の対象は一般人より広いようだ。



オーベル・ラムシュタットにある牧師館。1742年この家でG. C. リヒテンベルクは生まれた。

牧師館の向いに小さな博物館があり、リヒテンベルク関係の物が多く展示してある。その中のリヒテンベルクのブロンズの頭像。



リヒテンベルクのパターンを形成する装置を博物館長が手作りしたものを展示してあった。

## ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(11) ゲオルグ・クリストフ・リヒテンベルク



ゲッティンゲン市のマルクト・プラッツ広場には有名なガチョウを連れた少女の像がある。



この広場の少女像(左写真)の斜向いに新しいリヒテンベルクの像が建てられた。



ゲッティンゲン市のバーンロマイ墓地にリヒテンベルク夫妻の同形の墓石が並んで立っている。妻の旧姓はKellnerとある。



リヒテンベルクのポートレートには異様なものが多いが、これはカツラをつけた端正な銅板画である。

### 表紙写真

#### ミヤマリンドウ(深山竜胆) (リンドウ科)

深山(みやま)に生えると言う意味から、高山植物にミヤマの名前がつくものはたくさんあります。ミヤマリンドウは、背丈が5~15cm多年草。亜高山帯より上部の草地や湿地などに咲き、径は2cm前後、青紫色のきれいな花を付けます。花冠は大きく5つに分かれ、その間にまた5つの小さな副片があります。立山・大日岳で撮ったこの花は、あまりにも背丈が低く本当はもう少し斜めから写したかったものです。(写真文 北原)

### 編集後記

暑さ寒さも彼岸まで。

古来の諺どおり、今年の猛暑も彼岸を契機にすっかり様相を変え、本当に日本の四季は有り難い、いいものだと思われ皆様も実感されたことでしょう。すすき、萩、葛、女郎花など秋の七草、そして秋を彩る紅葉を楽しむ季節となり、郊外へ出かけるのがまた楽しい季節となりました。

「化学分析の基礎技術」として弊社の経験を中心に連載して今号で4回目となりますが、多くのご寄

稿者から熱意のこもった論文をお寄せ頂き、お蔭様をもちまして本誌を毎号発行できますこと、また平素より多数のご意見、ご要望を頂くなど皆様の暖かいご支援には心より厚く御礼申し上げます。

本誌の新規配布、配送先変更、記事転載、ご投稿など、各種お問い合わせには何かと至らぬ点もあるかと存じますが、その他ご要望などございましたら [chemiti-info@gms.kanto.co.jp](mailto:chemiti-info@gms.kanto.co.jp)までご遠慮なくご連絡下さいようお願い申し上げます。(古藤記)



関東化学株式会社

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3丁目2番8号  
電話 (03) 3279-1751 FAX (03) 3279-5560  
インターネットホームページ <http://www.kanto.co.jp>  
編集責任者 古藤 薫 平成17年10月1日 発行